

時々ちょっとした違和感の中から、ふと疑問が生じることがあるが、最近立て続けに経験した中から浮かんだ疑問がある。コンサートやリサイタル、舞台上、出演者が「今年、幾つになりました」と年齢発表をすることだ。それに対して拍手が起こることも暗黙の了解で、拍手をせねばしらけるので仕方なく拍手する。この年齢発表に何の意味があるのだろうか？

「長い間人気を保っています」「この年でもこれだけでできます」「この年だから少々実力が落ちていても不思議はない」「この年なので、こういう時代感覚なのです」見た目の若さで判断されると、「(幼く見られて)可愛い」「(若いくせに)生意気」「(若そうなのに感覚が)老けている」など、あらぬ誤解を受けかねないから、〇歳ですと発表するのか。〇歳であるから、この時代はこういう感覚で、世の中はこうだった。だから今の世の中の疲弊に対して、舞台を通してこういうことを訴えるという説明か。

まずファンなら、出演者の年齢は心得ている。パンフレットやチラシに〇年〇〇学校卒業と書かれていれば、そこから年齢は推測できる。舞台を鑑賞する人が、出演者の年齢発表を聞いて拍手をするのは、どういう感覚なのだろうか？

「あら、私と年が近いわ」という親近感を生むのか。同じ年齢なのに「私の方が若いわ」「私の方が老けて見える」という自信や落胆から、意欲や発奮を生むのか。「ほう、あの年齢で頑張っているとはすばらしい」という感心を生むのか。「へえ、僕も頑張ろう」「僕もあの年までに、あのようになりたい」という希望や目標を生むのか。因みに特別な思い入れのない「単なる観客」の私は、「〇歳、あ、そう」と何の感慨も生まない。歌なら歌、演技なら演技、それ自体に引き込まれているので、トークで話している内容が自分の過ごした時代と呼応しなくても、「それ知っている」「それ知らない」と心の中で思うだけである。知らないからつまらないと思うより、古いことも新しいことも、今まで知らなかったことを耳にしたことで、ちょっとした面白さを感じるだけである。したがって「年齢発表」に拍手をする気が起こらない。でも、一応、客席の反応に合わせて「ここで拍手ゼロだったらしらけるだろうな」と想像しつつ拍手する。正直、その人の年齢に興味はないので、却ってしらける。

けれどこうも思う。「年齢発表」は、「自分はこの年齢だけれど、今回この舞台のテーマを扱うことで(この時代の歌について知ることで)、古い時代にこんな良いものがあつたことに気づいた」という紹介になるし、一息つかせて客席を和ませるための演出とも受け取れる。でもその場合でも、わざわざ「年齢発表」という形で表さなくても済むような気がする。年齢を発表するのは「今まで頑張ってきてこの年を迎えた」という感慨か、「自分もこの年になってしまった」という感傷か。称賛の拍手を送るべきか、励ましの拍手を送るべきか。この場合は拍手が必要だろう。

ところで世の中の人には、どれほど自分の年齢を自覚して、どれほど人の年齢を気にするのだろうか。それによってどれほど自分の人生を判断して、どれほど人の人生を思い遣るのだろうか。「年齢」は、何の基準か。経験の蓄積か、衰えの加算か。個性の判断基準でないことは間違いない。年齢にふさわしい行い、年齢に拘わらず新しいことへの挑戦。でも見ている限り、積極的に自分の人生を進めてきている人は、皆若々しく輝いている。だから正しい個性の輝きに年齢表示は必要ないと思う。(2016.11.26)